

## 審査員特別賞

「美味しい」を世界へ

宮崎県立延岡星雲高等学校 3年

佐藤 天音

私には夢がある。それは、食を通して世界の人々を笑顔にすることだ。

食べることが大好き、将来は食に関する仕事に就きたいと考えていた私は、この夏アメリカのニューヨークへ「食と音楽」というテーマで留学した。初めての海外、しかも一人旅。早々に迷子になり、言葉の壁や慣れない外国暮らしのストレスで食事がとれなくなってしまった。食べ物を前にしても食欲が湧かない。無理して食べても美味しいと感ずることが出来ない。そんな日々が一週間以上も続き、本当に辛かった。大好きな食べることがままならない状況で、精神的にも肉体的にもかなり追い詰められたのだ。

テーマである食に関する活動を現地で探して、あるボランティアの存在を知った。スープキッチンという、ホームレスや障害のある方に温かい食事を提供する、食事支援のボランティアだ。実際に参加してみると、まずホームレスの多さに驚く。この日、800人もの人々へ温かい食事を提供した。ここでは栄養満点の食事をスタッフがトレーに配膳、それを持ち運び、最後にアイスティを受け取りテーブルに座るという流れだ。建物の中に入ったときから、私達スタッフとのコミュニケーションが始まる。最初のうち彼らは、警戒や緊張からかとても硬い表情をしている。しかし、だんだんコミュニケーションを取るうちに笑顔が増えてくる。私はその光景を見て、美味しく食べることの意味を考えさせられたのだ。

ただ栄養を摂るだけではなく、誰かとコミュニケーションをとりながら食べる大切さ、食環境を整えることの重要性を強く感じた。また、彼らを笑顔に出来ただけではない。私にも影響があった。つたない英語で会話をして彼らと共に笑い合い、食事をしたことで私も食べられるようになったのだ。音、匂い、雰囲気、五感で美味しいと感ずて頂いた。

ニューヨークには、食べ物を求め彷徨うたくさんのホームレスがいる。その一方で街のごみ箱には、毎日たくさんの食べ物が捨てられている。飲食店の食べ残しがとても多く、両極端な実状にもどかしさを感じた。

世界には、十分な食事が摂れず食環境の整っていない現実がある。貧困や紛争、理由は様々で、犠牲になっている多くは食べ盛りの子供達だ。世界でそういう現状があるにもかかわらず私達の住む日本や先進国では、食べ残し、賞味期限切れなどで毎年13億トンが捨てられている。これは世界の食料の3分の1にあたる量だ。いま、フードロスが地球環境に与える負担は大きな問題となっている。温室効果ガス。気温の上昇や雨の降り方など気候の変化。干ばつや洪水で食料を作るのが厳しい環境の中、その影響をもっとも受けている人々がいる。アジアやアフリカなどの最貧国に住む小規模な農家だ。この負の連鎖を止めなければならない。

安全で栄養のある温かい食事を、地球上のすべての人が安心して食べられるように何をするべきか。まずは、残さず食べること、食物や食べられる環境に感謝すること、そして世界を知ることだ。私は留学中に、食べることの苦しさも楽しさも味わった。そして、生きるために食べることの大切

さを改めて感じた。笑顔で温かな食事をとれる、このしみじみとした幸せを決して忘れない。

私の小さな体験だが、食べることの喜び、改めて食に関わり世界を笑顔にしたいという決意を、帰国後に留学報告として高校で発表した。自他共に認める、食いしん坊の私。きっと太って帰ってくるだろうという多くの予想を裏切り、ひと月近くで四キロ痩せた身。食の苦労も感動もリアルに伝わったと思う。私の発表を聞いた人が、これをきっかけに食に対する関心を少しでも持ってくれることを願っている。

「美味しい」は生きる力だ。「美味しい」を世界へ、そして笑顔に。